

人口問題研究新
研究資料第三五號

昭和二十三年十月一日

戦時中における兒童の生育状況に関する調査(1)

——埼玉縣入間郡福岡村について——

厚生省人口問題研究所

ほく だき

本群は戦時における乳幼児及び児童の養育状況に関する
調査の一前段として、研究員吉木尚雄の手によるものである。

昭和二十三年十月一日

人口問題研究所

不調査は昭和21年施行の農村人口調査力調査に附随して行われた学童は給の資料に基
き、今又改めて調査した結果が如何に推移したか、又調査結果が如何なるものか、又如何
なる変化を来したかを要知する為には、

(4)

取敢へず、徳永といた、埼玉縣八潮郡朝霞町を遷じ、調査した。
調査年度は昭和21年4月、調査人員は男女各1名(中 男児1名、女児1名)。
調査方法、教員の手による。又調査学校は調査年度に於て、然して、満年齢は、
たゞへず、6歳以上7歳未満を7年とし、其他之に準ずる。

福岡村は川原市東部之里の農村であり、人口も1000(中 孫開居も9人)、農業
者も3割を占め、米俵も僅少の心算である。保健状態は悪く、産科医師も、診療所
も乏しく有する。

今、村の出生、死亡の状態は次の如くで、

昭和	18	17	15	19	20
出生率	36.6	36.2	44.7	43.7	31.0
死亡率 (人口1,000=1)	15.7	13.7	13.8	16.1	23.2

出生率については年齢構成が全国と同へと假定すれば、全国の最高率36.19(大正9年)を記録し、18年には44.7に上つてゐるが、其後減少して20年には、31.0となるとなつてゐる。而も、20年度全国の22.9よりは未だ高位を占めてゐる。同じく、死亡率は17年より、逐次増加して、20年に三り23.2と上つてゐるが、20年度全国の22.9よりも尚低い。従つて自然増加も全国平均を優に上廻つてゐることになる。

Ⅲ

調査成績は別表の通り、疎開児童の人数少い為、或程度に制約を受けたが、大體の趨勢は察知出来る。又近年同一個体の成育の調査が不可能なる為、戦争の影響の考察に際しては、家族生活の変化を、個体出生的变化に代替して検討した。文部省の累年統計も昭和15年乃至16年より急激の地位低下を見せてゐる。

人身長

由來身長は松村博士の人類学的研究と金岡博士の調査によつて明かなる如く

(1) 都倉人は、各年令を通じ、農村人より平均1/2cm高く、又、吉田博士吳他の統計

が總て示す如く

(a) 1/2才迄は男子は女子より高りが、2才〜3才の期間に追越され、4才以後再び女子より高くなつて以後その差は大となる。(仔細も参照) 事が平時に於ては一歳である。

本調査に於ては1/1才乃至2才迄は(1)の現象が示され、就中2〜3才の間はむしろ平時以上の差を示してゐるが、それ以降現象を察し、殊に疎開児童の成長不活潑^{怠惰}を察しつ付けてゐる、4才に於ける、疎開男女の低下は、人数少きを爲、特有の現象かどうかは疑問であるが、少く共、甚だこの年令に於ける成長が少い事だけは言える。

又、(b)の現象は土着児童に於ては、2才の時、追越しほあるが越したまへで、男子の盛返しは現象なり、疎開児童では、この追越しが、1才早く現れる。夫に男児の

成長が著しく、緩慢である。男児の成長は、何才期後より平常の向上線とほぼ同一の傾向を示す。女児の成長は、何才期後より平常の向上線とほぼ同一の傾向を示す。男児の成長は、何才期後より平常の向上線とほぼ同一の傾向を示す。女児の成長は、何才期後より平常の向上線とほぼ同一の傾向を示す。

2. 体重

体重も、文部省統計、吉留氏統計に依れば、

- (イ) 都会人は各年令を通じて、農村人より約3%〜5%重く、又
- (ロ) 1才と2才男児重く、3才と4才に互ひ男児が優位となり、

以後この差は益々開く。

本調査に於ては各年令には(イ)現象が繰り返して見られるが、5才以後は(ロ)現象とすると逆現象となり、殊に5才の男児が優位となり、

(1) 現像は、9.2の2/10には平時より甚くは明瞭に、男児が、操券で、急激には、ノ不慮にて、
是着疎弱共にノノ才新鋭とミ加知、それ以外は、身長と同しく、男児の成長が著しく緩慢となり、
就中、疎爾男児は、低く可なり。これに、身長の特異と異しく、男児の成長が著しく緩慢である。

この勢びでは再進越は、恐らくノノ才以續に否合と思はれる。
文部省企画統計(第1号)にて、(1)は並列表で、編制時に於ける男児の才、又児のノノ才の
如き知外なき事には都合なし、疎爾部身長の繰造である。

身長体重を違ひ、疎爾先童の都合の因子に、疎爾部身長の繰造と、或時は殆減
殺して明瞭に現れていると云ひ得る。児童の体格は、或年のうちに、内外源の発現が、
起つて、敏感なる所以である。

又、各種の統計により、6歳5年以降、身長が、身長に、或る時に、
にあり、体重も、これに反例した増加を示し得るが、本調査に於ては、身長に於ては、ノノ才
才に於て、5.2/14.0の体重は、1.6/2.5の才の増加を示し、(子/父)ノノ才の増加の傾向
向にあるべき筈のものである。是は、体下下下、是は、最年長の才の才の増加を示してゐる。

3. エコーレル指数 ($\frac{\text{体重}}{\text{身長}^3} \times 100$)



各氏の成績に依れば日本の平時に於ける児童は7.2才の間に於ては、大体ノ3才より減り、少くして1.2才に至るものが通常であるが、本調査に於てはその幅が、廣に広む。(Fig 5)。先づ7才に於ける値は、身体の充実せる結果より、むしろ身長が低すむる結果で、及んで危険である。以後大体、土着児より疎用児が低値を示すが、ノ才に至り、疎用児のみが可成り高位に来るが、これは、 6.90 の分布で 7.2 なる為、信用出来ぬ。疎用男児ノ才の凸起は着るしいがこれは、体重のズキに原因する。ノ2以後の男女共の安値と共に考へ合せ、身長成長の緩慢さが再び問題となつて来るのである。

4. Tuberculin 反応

土着児は、男女共に7才に稍、陽性率多く、8才以後、 $9.2-10$ 才に感まつて、ノ才以後可成り増加する傾向にあるが、疎用児にては、この山が、男で、3才づつ、づいてゐるが、山が二つとなつてゐる。而もノ才ノ才に、 30% 以上の高率を示す事は、大きな特徴である。家來環境や、食糧事情の相違を考慮に入れれば、なる

が、生活犯を及へる事は少くともマリナ本にほなる事は想像がたく、一方文部省の全
 国統計(昭和21年度)の11214才に於ける31.7%と33.91%(男子)34.01%
 の40.59(女子)に比すれば、土着児は勿論、極めて低く、採用児も稍、低いのは、
 食糧関係と思われ。山が一乃至二つ見られ漸次上昇線をとらむ理由は今後、
 他地方の調査を俟つて検討したい。尚、本調査と同時に同行はれた国全体の検査の結
 果と文部省統計とを比較すれば次の通りである。

年齢	陽性率 (福岡村)	(文部省統計、昭和21年)
16	29.41	54.86
17	20.83	55.42
18	55.56	55.90
19	47.62	42.01
20	41.67	

男子
 の4

但、これは、一般人と学生との比較である事を一応考慮に入れればなるが、都会人を含めた統計より、福岡の如く農村が低率にある事は云い得る。

(身長)

年齢	男				女			
	n	M	σ	d	n	M	σ	d
		cm				cm		
7	50	108.67	4.30		11	108.72	3.18	5.13
8	35	114.02	4.68	5.35	11	113.90	4.45	5.00
9	60	116.95	4.81	2.93	22	118.90	5.30	5.30
10	49	123.80	5.11	6.85	6	124.28	6.71	2.59
11	39	126.97	4.28	3.17	12	126.87	4.00	4.15
12	47	132.55	5.48	5.57	7	131.02	3.69	5.54
13	42	136.30	5.39	3.74	9	135.56	4.14	4.61
14	45	141.87	6.73	0.57	2	134.95	1.47	

7	63	107.72	4.62		1	117.75	3.08	4.70
8	45	113.54	4.30	5.76	5	114.65	1.70	2.32
9	60	117.08	5.29	3.54	25	116.97	5.80	4.48
10	46	121.17	6.09	4.04	7	121.45	5.97	6.89
11	63	125.86	4.61	4.69	9	123.34	5.46	2.16
12	39	131.04	5.77	5.18	22	130.50	5.31	4.45
13	22	138.27	5.28	7.23	8	134.75	9.17	3.59
14	40	142.65	6.05	4.38	3	138.54	10.19	

(体重)

年齢	男				女			
	n	M	σ	d	n	M	σ	d
		kg				kg		
7	50	18.70	1.84		10	18.80	1.54	1.17
8	35	20.54	2.22	1.84	11	19.97	2.37	2.13
9	60	21.79	1.97	1.25	22	22.11	2.17	1.68
10	47	24.86	3.01	3.07	6	23.79	2.14	3.12
11	39	27.24	3.34	2.38	12	26.91	2.83	0.83
12	48	28.55	3.08	1.31	7	27.54	2.35	3.28
13	42	31.49	4.03	2.94	9	30.72	2.71	2.42
14	45	32.07	3.16	0.58	2	32.50	0.20	

7	63	17.67	1.81		6	18.03	1.30	1.97
8	45	20.50	2.56	2.83	5	20.00	2.37	0.92
9	60	21.30	2.70	1.00	25	20.98	1.18	2.00
10	46	23.49	2.87	2.19	7	22.98	3.23	2.55
11	63	25.57	2.89	1.08	9	25.53	2.58	1.81
12	39	27.57	3.84	2.00	22	27.34	3.84	2.42
13	22	32.11	4.27	4.54	3	27.76	3.31	
14	40	36.54	5.09	4.43	3	35.66	5.95	5.60

口 - L R 指数

年齢	土着者				疎州者			
	n	M	σ	d	n	M	σ	d
7	51	144.55	12.80	0.55	10	149.50	10.90	15.25
8	35	138.00	9.65	2.65	11	134.25	12.95	3.32
9	37	135.35	11.00	4.26	22	130.87	10.45	7.19
10	49	131.09	7.05	+1.42	5	123.70	12.75	+9.15
11	39	132.51	12.22	9.78	12	132.85	11.60	12.25
12	48	122.73	9.80	+1.30	7	120.60	4.20	+0.29
13	42	124.03	9.55	+0.37	9	120.39	16.05	+1.17
14	46	124.40	10.65		2	122.00	4.75	

7	62	140.66	11.35	3.54	6	135.33	11.35	2.33
8	45	137.11	11.15	5.61	5	133.00	12.35	1.60
9	60	131.50	10.20	+1.25	25	131.40	13.50	3.68
10	46	132.95	14.55	4.57	7	127.72	11.55	7.94
11	68	128.18	11.75	5.53	9	119.78	8.45	+4.02
12	39	122.65	9.10	0.40	22	123.80	10.50	2.40
13	22	122.25	8.20	+3.53	8	121.40	10.35	+0.60
14	41	125.78	11.30		3	132.00	8.90	

男 ツベルクリン反応

年齢	n	陽性	陽性率%	疑陽性	n	陽性	陽性率%	疑陽性
7	50	5	10.20	1	11	0		
8	35	3	8.57		11	0		
9	50	2	3.33		22	6	28.57	1
10	43	3	6.12	2	6	1	16.67	
11	38	1	2.63	1	18	2	11.11	
12	48	3	6.25		7	0		
13	42	7	16.67		9	3	33.33	
14	45	6	13.33		2	1	50.00	

7	57	2	3.37		6	1	16.67	
8	44	0			8	2	25.00	
9	60	3	5.00	1	25	2	8.00	
10	46	1	2.17	1	7	0		
11	67	8	11.94		9	1	11.11	
12	39	4	10.26		22	3	13.64	
13	23	4	17.39		8	3	37.50	
14	43	5	11.63		3	1	33.33	

福岡村

男 女
 着 味 着 味
 上 上 下 下
 男 女 男 女

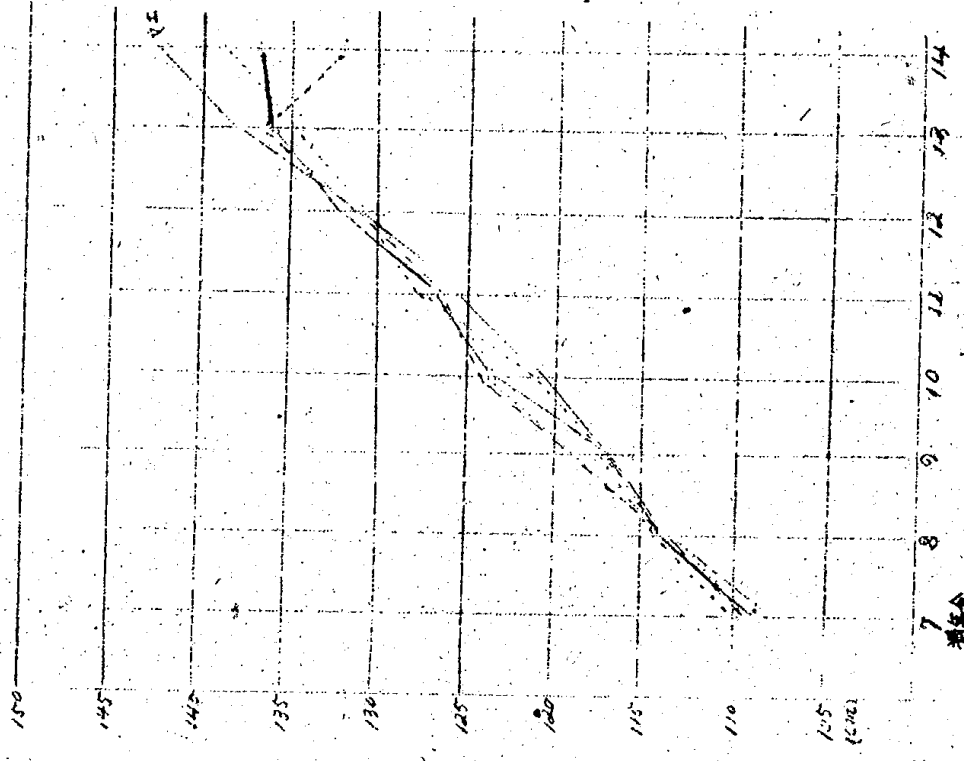


fig 1

全国 (大都會)昭和20年度統計

男 女
 着 味 着 味
 上 上 下 下
 男 女 男 女

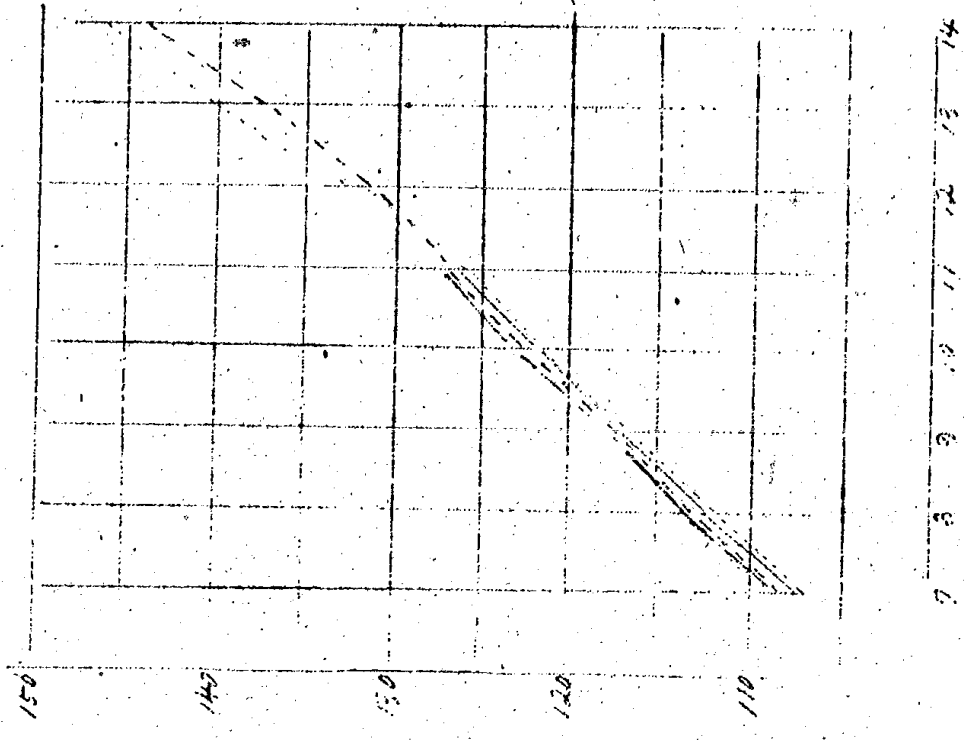


fig 2

全國以用者 昭和20年度統計

体重

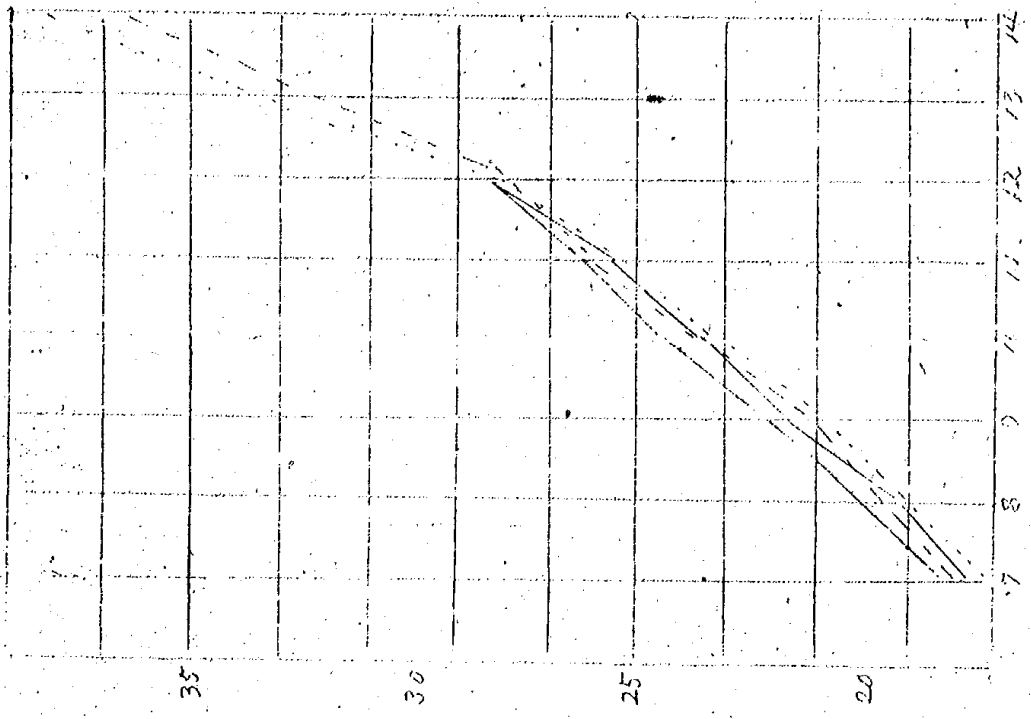


Fig 4

男
女

福岡村

40

39

38

37

36

35

34

33

32

31

30

29

28

27

26

25

24

23

22

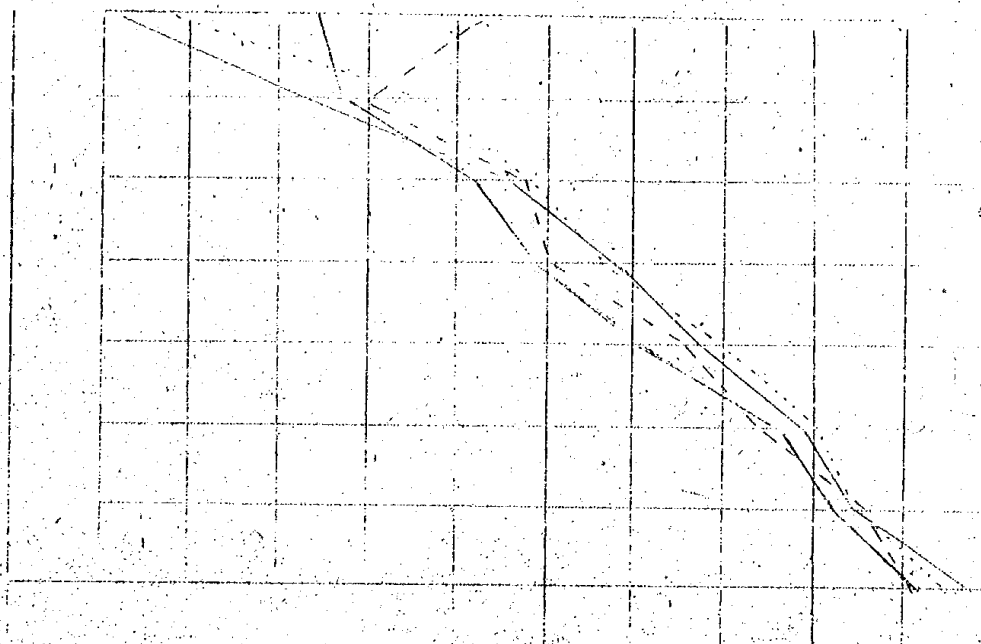
21

20

19

18

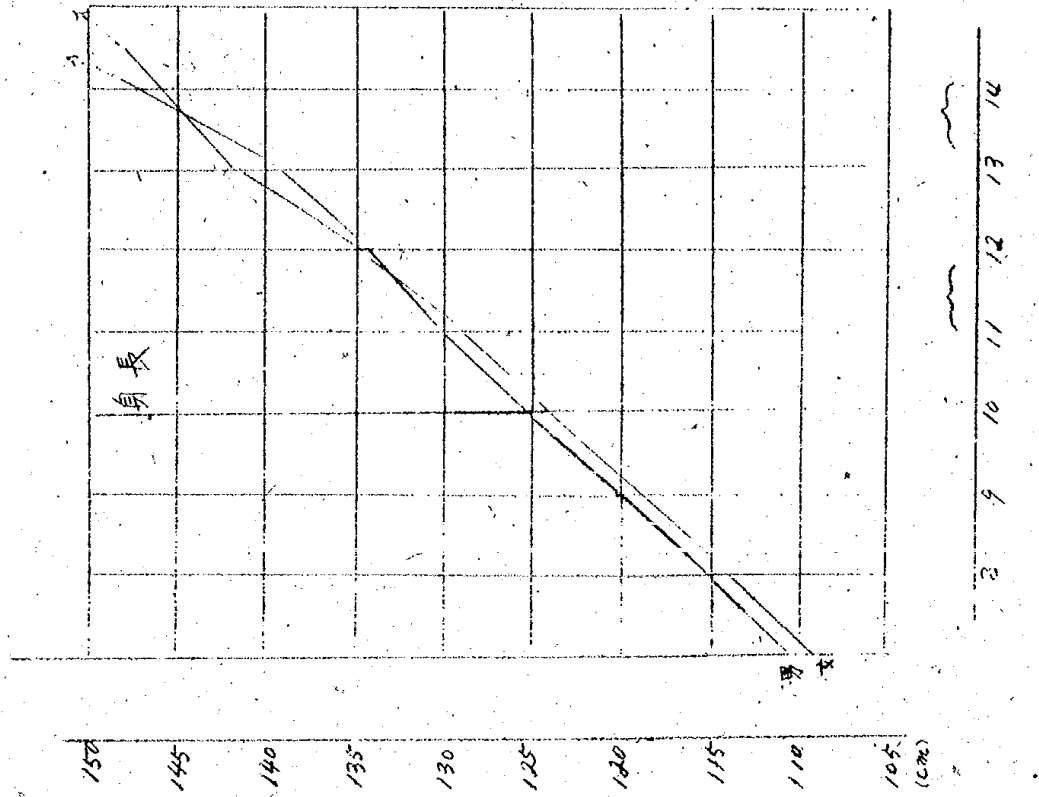
17



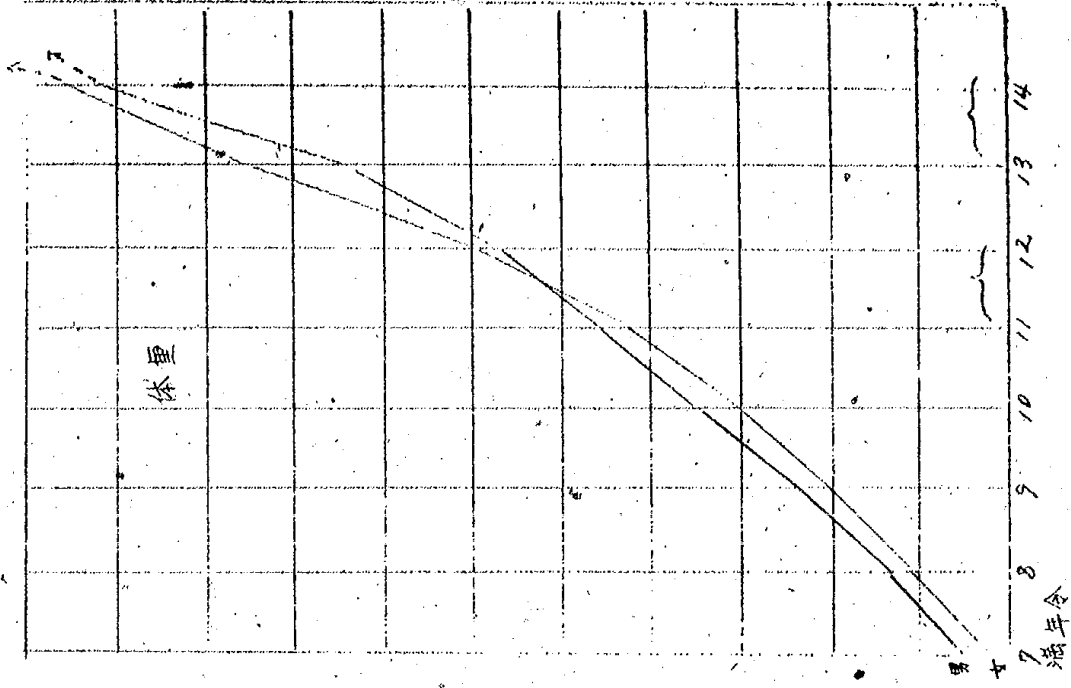
(kg) 7 8 9 10 11 12 13 14
年全

Fig 3

全國 (昭和17年度の吉田博士調査)



f 496



f 497

Rohrer's Index

楊岡村

— 男
— 女

